

青き犠牲

いけにえ

連城三紀彦



青き犠牲
連城三紀彦

文藝春秋

青き犠牲 奥付

昭和六十一年六月十日 第一刷

定価 九五〇円

著者 連城三紀彦れんじょうみきひこ

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号 一〇二
電話東京 (〇三) 二六五局 二二一

印刷 大日本印刷 製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目次

第一章	手	7
第二章	錠	85
第三章	血	105
第四章	光	167

装幀——村上みどり

青き
犠牲^{いけにえ}

第一章 手

順子は、階段を一段ずつあがりながら、

いる、いない——

胸の中で、二つの言葉を交互にくり返し続けた。四階の図書室に鉄男がいるかいないかを、ふっと階段の数で占ってみる気になったのである。踊り場の窓から西陽が黄色い光で流れ落ち、セーラー服の裾から覗いた足にまわりついてくる。順子は、「いる」「いない」を胸の中で呟きながら、グレーのスリッパの先についた黒い蝶の飾りでその光の流れを割るようにして階段を上り続けた。

そう、スリッパにしようか——

鉄男が、底が剥がれかけ、爪先に穴のあいたスリッパをはいているのを思い出し、順子の頭をそんな言葉がかすめた。それにしてもこの頃の鉄男はどうしたんだろう。スリッパだけ

ではない。学生服のボタンの一つが三日前からとれたままになっているし、髪ももう何日も洗っていないような嫌な匂いを放っている。

午前の授業が終わり、皆が弁当を開き始めると、ぶいと教室を出ていってしまう。夏休みが終わって、今日まで一カ月以上が経っているが、ずっと同じことがくり返されている。

二期の始業式の日からすでにおかしかった。「どうしたの、元氣ない顔してるじゃない」順子が声と一緒に肩へと掛けた手を、冷たい手で払い除けると、「悪いが誰とも喋りたくないんだ。しばらくこっちから話しかけるまで、放っておいてくれないか」そう言われたのだ。切れ長の目が鈍いとも鋭いともつかぬ、何か得体の知れない光をたたえたまま、そむけられていた。色白の方だが、不意に見せだした無表情は今までとは違いくすんだ色の皮膚をもう一枚顔にまもってしまったようにも見えた。

自分のことが嫌いになったんだろうか――

最初はそう心配したが、そんな単純なことではないらしかった。クラスの誰とも口をきこうとしない。「どうしたんだよ、あいつ」とか、「受験ノイローゼじゃないのか」とか陰でいろいろ噂にはなっていたが、皆、理由がはっきり掴めないまま、そのうちに無視するようになった。もともと口数の多い方ではなかったし、特別目立つ存在でもなかった。

ただ順子だけは、その変化を無視するわけにはいかなかった。高校二年、三年とクラスが

同じで、交際らしいものが続いているのである。「何かあったの、彼と」喧嘩でもしたのだと思われたらしい、女友達がそう尋ねてきたが、その返答を知りたいのは誰より順子自身である。

何度も声をかけようと思ひながら、だが鉄男の無表情は日一日と厚く頑丈な鎧にかわっていく。もう自分の知っていた鉄男とは全く別人になってしまったのではないかという不安が、口を衝きかける言葉を喉へと押し戻してしまい、そうこうしているうちに一カ月が過ぎてしまったのだった。

十月に入り、この数日の鉄男は特におかしかった。冬服の黒い学生服に変わったせいか、その分厚い生地で頑ななまでに自分を閉ざしているように見える。昨日も四時間目の英語の授業で、教師から酷い叱責を受けた。

短い文を訳すように言われたのだが、

「わかりません」

鉄男は反抗的な態度でそう一言だけ答えたのである。

「彼の母親は、どこへ出かけるのにも彼を連れていった」

という、英語の不得意な順子にも簡単に訳せる文である。本当にわからないのではないことは、順子にもすぐに察しがついた。鉄男は教科書を見ようともしせず、立ち上がると同時に

「わかりません」と口にしたのである。今まで一度も聞いたことがない投げやりな声だった。神経質な、容姿の線の女性的なまでに細い英語の教師はしょっちゅうヒステリックな声をあげ、生徒達にも嫌われているのだが、この時も鉄男の反抗的な態度を敏感に感じると、体を震わせてカン高い声を挙げた。

くどくどと続く叱責を、鉄男がどんな顔で聞いていたかはわからない。鉄男の席は順子の斜め前であり、ただ無言の黒い背が、何か得体の知れない緊張を孕^{はら}んで見えた。

その背が何かに似ていると思ったが、それが何か思い出せないまま、順子は自分が叱られたようにうつむいている他なかった。

鉄男はその授業が終わるまで立たされ続けた。

チャームが鳴り、結局一言も言葉を発せず銅像のように立ち続けていただけの鉄男に、教師が憎々しげな一瞥を投げて出ていくと、鉄男もまた黙って教室を出た。順子の足がひとりでに動いた。弁当を開きながら皆が好奇心をむき出しにした目を集めてきたが、それには構わず、鉄男の後を追って教室を飛び出していった。

鉄男は、中庭の柵に守宮^{ヤモリ}のように貼りついてその柵に囲まれたプールを眺めていた。孤独な、誰も寄せつけようとしないう背である。

声をかけても、今の英語教師のように無言の拒絶にあいそうではためらったが、順子は

思いきって近寄った。

「どうしたのよ。私ずっと心配してるのよ。私の方まで変になっちゃって、昨日も『何してんの、この頃ぽおっとしてるけど』って母さんに叱られたじゃないの」

順子の言葉を、鉄男はやはり黙殺し、横顔で誰もいないプールを見ていた。秋めいた光がただの透明な水に美しい模様を描きこんでいる。鉄男は灰色の視線で光とともに揺れ動く水突き刺していたが、やがて、その横顔は不意に、

「淋しいだろ、こういう風景——」

そう呟いた。ひと月ぶりに順子に向けられた声は、以前と変わりなく、変声期にしくじったように、大人びて低く、哽しどれていた。

「そうね、誰もいないプールって、いかにも夏が終わったって感じだわ」

順子がつき合った言葉を、鉄男は唇の端で馬鹿にするように笑った。

「そうじゃないよ。人がどんなにいいいたって柵の向こう側の風景ってのは淋しいんだよ」

そう言うと、金網を掴んで思いきり揺すぶった。

「いくらこうやったって、柵の向こう側へは出られないもんな」

「どうして？ 私たち、今、柵の外にいるわ」

「何故柵の外にいとわかるんだ。俺たちの方が柵の中に閉じこめられていて、このプールだけが柵の外の自由な世界かも知れないじゃないか」

鉄男はもう一度力いっぱい金網を揺すった。

怒りが顔を歪め、順子の目には実際、鉄男が外に出たがって跳ねているように見えた。プールの静かな、平和そのものの世界の方が柵の外側にあるようにも見えてきた。だが順子が今の言葉の何も理解できないうちに、鉄男は諦めたように舌打ちして、体をぐるりと回し、金網を背にした。そして今度は横顔の視線をコンクリートの冷たそうな校舎に当てながら、「お前、中学の頃、父さん死んだって言ってたな」

また唐突に聞いてきた。

確かに順子は、三年前、中学三年の時、父親を交通事故で失くしている。生命保険金で母親が小さな洋装店を開き、それ以後三年間は、母娘二人だけの生活である。

順子は肯き、怪訝けげんそうな目で鉄男を見た。

「悲しかったか、親父が死んだ時——」

「そりゃあ、悲しかったわよ。ぼろぼろ泣いたし、一カ月くらい信じられなかったわ」

「それは、いい親父だったからだろ？」

「そうでもないわ。飲んだくれたり浮気したり、自分は好き勝手なことやってたくせに、私